



ショップコンテスト —応募用資料—

読み物率高し...

CDコーナー仁義なき戦い

今回の資料の目玉。

「スタッフ CD一押しコーナー対決」

手描き派 VS

イラストレーター派

コーナーへの愛情がハンパない2人のスタッフによるPOP合戦。

今回は特別に実物POPをお付けしてお届けする。

ジミ・ヘンドリクス 生誕70年コーナー



まずは、イラストレーター (& フォトショッパ) を
駆使したコーナー、2棚。

ジミヘン棚は

上3段で ARTIST 作品をたっぷりと
展開。

下7段では、「偉大なギタリスト」
のコーナーを展開

サイドPOPも手を抜かない



渾身のコメントは別冊。



ジミ・ヘンドリックス

「歴史上最も偉大な100人のギタリスト」第1位



天才ギタリストとして多くのミュージシャンに多大な影響を与えたロックミュージックのバイオニアの一人。右利き用のギターを逆さまにして左利きの構えで演奏するスタイルで知られる。ヘンドリックスは、エレクトリックギターの演奏家として非常に高い技術と表現力を備えていただけでなく、画期的な技法の考案によってエレクトリックギターという楽器の可能性をそれ以前とは比較にならないほど拡大しており、メジャーでの活動期間がわずか4年ほどであったにもかかわらず後世のギタリストに与えた影響が比類のないほど絶大であることも合わせ、多くのミュージシャンや評論家から史上最高のロックギタリストと呼ばれる。1970年9月18日未明、ロンドンのホテルに滞在中に急逝。死亡原因としては、睡眠前に飲酒しながらバルビツール酸系睡眠薬を併用したことによる中毒、及び睡眠中に嘔吐したことによる窒息死とされる。

エリック・クラプトン

「歴史上最も偉大な100人のギタリスト」第2位



1960年代からヤードバーズ、クリームなどのバンドでギタリストとして活動。1963年、ロンドンでも注目を集めていたバンド、ヤードバーズに迎えらる。ヤードバーズでのプレイが認められ、その存在が注目されるようになったが、バンドはポップ路線を志向するようになり、クラプトンは他のメンバーと意見が対立。1965年にバンドを去ることになる。ヤードバーズ脱退後、ジョン・メイオール・ブルースプレイカーズに参加この頃、その演奏について、ロンドンの街中に“CLAPTON IS GOD”の落書きが現れ、「ギターの神」と呼ばれるようになった。

ジミー・ペイジ

「歴史上最も偉大な100人のギタリスト」第3位



世界で最も成功したロックバンドの一つであるレッド・ツェッペリンのギタリスト兼リーダー、プロデューサー。クラプトン脱退後のヤードバーズへの参加。ジェフ・ベックとのツインリード・ギターのスタイルがバンドの売りとなった。スタジオ・セッション・ギタリストを経て、バンドの録音を経験するうち、レコード制作に要求される配慮やボーカリストの重要性に目覚め、偶然性も加わってオーソリティーともいえるメンバーを揃えて「レッド・ツェッペリン」を結成。ペイジのギタースタイルは、プリティッシュ・フォークやカントリーに影響を受けつつも、ブルースを基本としている。アコースティック・ギターの技術も高く、セッションマン時代を通して培われたギタースタイルの幅も広い。

キース・リチャーズ

「歴史上最も偉大な100人のギタリスト」第4位



ミック・ジャガー、ブライアン・ジョーンズと共にローリング・ストーンズを結成。1969年ブライアンの脱退により、ミック・テイラーがセカンド・ギタリストとして加入すると、ギターソロはほとんどテクニシャンのテイラーに任せ、自身はリズムに徹するようになる。彼が「史上最高のリズム・ギタリスト」の異名を取るようになるのはこの頃からで、テイラー在籍時の1970年代初頭において、完全に自身のギタースタイルを確立する。いわゆるスーパー・ギタリスト的なテクニックは持ち合わせておらず、少なくとも現在のレベルから考えれば決して巧いとは言いがたいが、単に技術の高下だけでは語れない「キース・リチャーズ」としてのギタースタイルがストーンズ・サウンドの核であり、キース無しではストーンズは存在し得ない。そのスタイルは、多くのギタリストに影響を与え続けている。

ジェフ・ベック

「歴史上最も偉大な100人のギタリスト」第5位



1965年、スタジオ・ミュージシャンとして多忙だったジミー・ペイジに紹介される形で、エリック・クラプトン脱退直後のヤードバーズに参加するが、様々な活動やツアーを行いながらも次第にメンバー間の確執が表面化し、健康上の問題を理由に脱退することとなる。その後ベックは自身の新たなバンドを結成する。その後はフュージョン、エレクトロニカ、テクノ/ロックサウンドなど様々なサウンドを追求。ギタースタイルにおいて、かなり独創的でトリッキーなことから、後継者になるようなプレイヤーも現れず、いつしか「孤高のギタリスト」と呼ばれるようになっていた。しかし、それにも関わらず、ギタリスト達の間で未だにカリスマ的な人気を保っているのは、やはり他の追随を許さないテクニックとセンス、並々ならぬギターへの情熱が伝わってくるからであろう。

B.B.キング

「歴史上最も偉大な100人のギタリスト」第6位



アメリカ合衆国のブルースギタリスト。1950年代から現在まで常に第一線で活躍してきたブルース界の巨人。1949年、ナッシュビルのレーベル、プレット・レコードに4曲を吹き込み、レコード・デビューを果たした。1951年末にシングル「3 O'clock Blues」がR&Bチャートの1位を記録。これを機に以降、数多くのヒットを世に送り出す存在となり、1951年から1985年までの間に実に74回もビルボードのR&Bチャートに曲を送り込んでいる。1987年にロックの殿堂入りを果たしている。

チャック・ベリー

「歴史上最も偉大な100人のギタリスト」第7位



ロックンロールの創始者の一人と言われているミュージシャン。特徴的なギタースタイルを使ったその音楽のスタイルは、後のロックミュージシャン達に多大な影響を与えた。また、社会的メッセージが込められた歌の数々は、1950～60年代当時の若い世代の共感を呼んだ。80歳を超えた現在も、現役でステージ活動を続けている。ベリーを敬愛していたジョン・レノンは、「ロックンロールに別の名前を与えるとすれば、それは『チャック・ベリー』だ」と発言している。また、1986年、ロックの殿堂入りを果たした際、殿堂では、「ロックンロールを創造した者を一人に断定することはできないが、それに最も近い存在はチャック・ベリーである」としている。

エドワード・ヴァン・ヘイレン「歴史上最も偉大な100人のギタリスト」第8位



ハードロックバンド、ヴァン・ヘイレンのギタリスト。同バンドのドラマーのアレックス・ヴァン・ヘイレンは実兄。ヴァン・ヘイレン兄弟はジェネシスというバンドを結成。その後、バンドは名前をヴァン・ヘイレンと改める。デビュー前から、右手の指でのハンマリングやプリングにより音を出す「ライトハンド奏法」を駆使した独特のギターサウンド広め、後世のギタリストに多大な影響を与えた。また、マイケル・ジャクソンの「Beat It」にギターで参加し、アドリブ演奏を披露している。

デュアン・オールマン「歴史上最も偉大な100人のギタリスト」第9位



弟のグレッグ・オールマンらと結成したオールマン・ブラザーズ・バンドのリーダー、リードギタリストとして活動。セッション・ミュージシャンとしても知られ、キング・カーティスやアレサ・フランクリンをはじめ、数多くのミュージシャンの作品に参加。デレク・アンド・ザ・ドミノスのアルバム『いとしのレイラ』ではギタリストとして重要な役目を果たしている。彼のスライドギターによる即興的な演奏は、多くのミュージシャンに多大な影響を与えた。1971年、交通事故により24歳の若さでこの世を去った。

ピート・タウンゼント「歴史上最も偉大な100人のギタリスト」第10位



ザ・フーのギタリスト。友人であったジョン・エントウィッスルとデュオを結成。その後ロジャー・ダルトリのバンド、デトゥアーズに加入する。バンドは、後にザ・フーとなりモッズ・カルチャーを代表するバンドと評された。右腕を風車のように回転させるウィンドミル奏法、ギターを破壊することで有名になった。ギターを打ち付けるのは最初はアクシデントによる物であったが、後に楽器の破壊はフーのステージでの定番アクションとなった。「エレクトリックギターを美しいものに変えた人物」とジミ・ヘンドリックスも認める白人ギタリストである。また、ジミ・ヘンドリックスもギターを破壊するアクションで知られていたが、モンタレーでフーの出番が先になりギターを壊すアクションを先に行ったため、ヘンドリックスは対抗して初めてギターに火を放った。

ジョージ・ハリスン「歴史上最も偉大な100人のギタリスト」第11位



1960年代にビートルズのリードギタリストとして活動し、解散後はソロとして活動。ソロでは、「マイ・スウィート・ロード」や「ギヴ・ミー・ラヴ」「レット・オン・ユー」などをヒットさせたほか、『オール・シングス・マスト・パス』は、ロック・アルバム金字塔として高く評価されている。スライドギターの名手としても知られる。2001年に肺癌と脳腫瘍のため死去。1988年にビートルズのメンバーとして、2004年に個人としてロックの殿堂入りしている。レノン＝マッカートニーの陰に隠れ目立たない存在であったが、ソングライターとしても頭角を現し、「ホワイル・マイ・ギター・ジェントリー・ウィープス」「サムシング」「ヒア・カムズ・ザ・サン」等の曲を完成させる。

スティーヴィー・レイ・ヴォーン「歴史上最も偉大な100人のギタリスト」第12位



13歳の頃には、クラブで演奏するようになり、早い時期からプロとして活動。そこで数々の憧れのブルースマンに出会う。1975年、「トリプル・スレット・レビュー」を結成。1978年に「ダブル・トリアル」と名乗り活動を続行。モンルー・ジャズ・フェスティバルに出演した際、演奏を見ていたデヴィッド・ボウイ、ジャクソン・ブラウンに声をかけられる。この時の出会いが、後に彼が成功していくきっかけとなった。1990年、エリック・クラプトン、パディ・ガイとともにブルース・フェスティバルに出演。終了後、シカゴへ向かうためヘリコプターに搭乗。しかしこのヘリは本来彼が乗る予定ではなかったが、空席が出たため急遽搭乗した。濃霧の中、ヘリは8月2未明にアルパイン・ヴァレイ・リゾートの電線に接触して墜落。急遽空いた一席を選んだ、スティーヴィー・レイ・ヴォーンは帰らぬ人となった。

アルバート・キング「歴史上最も偉大な100人のギタリスト」第13位



アメリカ合衆国ミシシッピ州インディアノーラ出身のブルース・ギタリスト、シンガー。B.B. キング、フレディー・キングと並び、ブルース・ギタリストの3大キングと称される。チャーキングを多用したシンプルかつ豪快なプレイは、ブルース界のみならず、エリック・クラプトン、ジミ・ヘンドリックスSロック・ギタリストにも多大な影響を与えた。左利きの彼は、右利き用に弦を張ったギターを逆に持って弾いていた。さらにチャーキングをしやういように弦は低め張りかつチューニングは変則的。彼の独創的なギター・プレイの秘訣はこのような設定にもあったと言える。1992年12月21日、メンフィスで心臓発作のため急逝。その数日前にロサンゼルス郊外での公演をこなし、自宅に戻ってきた矢先の出来事であった。

デヴィッド・ギルモア「歴史上最も偉大な100人のギタリスト」第14位



1968年にピンク・フロイドに正式メンバーとして加入。バンドを支えるギタープレイやヴォーカルで活躍。ストラトキャスターをおもに使用するギタリストとして知られる。ギタリストとしては、派手なプレイは少ないものの、緻密な音作りによって叙情的で美しい独特のサウンドを生み出し、高い評価を得ている。ブルーギーかつ浮遊感のあるギルモアのバックギタリングは、フロイド・サウンドの代名詞ともいえる存在である。また、「コンフォタブル・ナム」「タイム」「マネー」などでのソロはロックの歴史に残るプレイとして名高い。ピンク・フロイド活動停止中の1980年代からは、フロイド以外にもスタジオ・ミュージシャンとして多くのセッションに参加している。ポール・マッカートニーはレコーディングのみならずツアーにも帯同している。

フレディ・キング

「歴史上最も偉大な100人のギタリスト」第15位



米国テキサス州ギルマー出身のブルース・ギタリスト、シンガー。B.B.キング、アルバート・キングとともにブルース・ギタリストの3大キングなどと称される。フレディ・キングのテキサス・ブルースと様々な音楽スタイルの混合プレイは、マイケル・ブルームフィールドやジェリー・ガルシアなどのロック、ブルース・ギタリストにも影響力をもち、ジェフ・ベック、エリック・クラプトン、デイヴ・エドモンズ、ピーター・グリーン、ミック・テイラー、ZZトップらにカバーされ続け、ロック界にも大きな影響を与えた。精力的に活動が続いていた最中の1976年、テキサス州ダラスにて、心不全により42歳の若さで急逝した。2012年に、ロックの殿堂入りを果たした。

デレク・トラックス

「歴史上最も偉大な100人のギタリスト」第16位



オールマン・ブラザーズ・バンドのオリジナル・メンバーであるブッチ・トラックスの甥で、9歳でギターを始める。現在はオールマン・ブラザーズのギタリストである一方、自身のデズキ・トラックス・バンドでも活動している。著名ミュージシャンの様々なセッションにも参加し、2006年にはエリック・クラプトンのツアーにも同行した。ちなみに彼の名前「デレク」は、デュアン・オールマンが参加したクラプトンのバンド、デレク・アンド・ザ・ドミノスから取られている。微細な音程を自在に操るスライド・ギターの天才として名高い。ロックとブルースを基本としつつ、ジャズ、さらにインド・アラブ音楽など幅広い音楽性を備えている。

ニール・ヤング

「歴史上最も偉大な100人のギタリスト」第17位



クロスビー、スティルス、ナッシュ&ヤングやバッファロー・スプリングフィールドのメンバーとしても活躍。1969年にソロデビューし、1995年にはロックの殿堂入りを果たした。一芸に安住せず、また巷の評価に拘泥することなく、絶えず新しいものに挑戦し続けている。ボーカルも个性的で、その鼻にかかったような弱々しい印象のハイトーンの声は、バラードには無垢な繊細さ、ハードなロック・ナンバーには悲痛な表情を与えている。ギタープレイに関してはいわゆるテクニカルな側面は強くないが、歪ませた爆音の如きサウンドで多彩な情感を引き出すそのプレイは、まさにオンリー・ワンと言ふべきものとして支持される。また、武骨かつ繊細なアコースティック・ギターのプレイも人気が高い。

レス・ポール

「歴史上最も偉大な100人のギタリスト」第18位



アメリカのギタリストでかつ発明家で、ソリッドボディーのエレクトリック・ギター、「ギブソン・レスポール」の生みの親。レスは8歳のときに初めて音楽に関心を持ち、バンジョーを習った後、ギターを弾き始める。1941年、レス・ポールは新しいエレキギター「THE LOG」を作成、ソリッドボディーのエレキギターの原型とも言える代物である。1995年から、死去した2009年まで、毎週月曜日に、ニューヨーク市マンハッタンのイリジウム・ジャズ・クラブにて「レス・ポールナイト」と称したライブを行っていた。このイベントでは、ポール・マッカートニー、ディック・ベック、キース・リチャーズ、ラリー・カールトン、ジョージ・ベンソン、スラッシュ、ブライアン・メイ、スティーヴ・ルカサーなど、多くの有名アーティストが飛び入り参加して、レスと競演した。

ジェームズ・バートン

「歴史上最も偉大な100人のギタリスト」第19位



アメリカのギタリストで、ミスター・テレキャスターとの異名を持つ、テレキャスター使い。10代中ごろからプロのギタリストとして活動を始め、57年にデール・ホーキンスが発表した「スージーQ」で一躍注目される。この時、まだ15歳であった。特徴的なギター・リフもジェームズが考えたもので、ほとんどの部分をバートンが作曲。その後、ボブ・ルーマン、リッキー・ネルソンのバンドで活躍。バンド脱退後、エルヴィス・プレスリーのTCBバンド・リーダーに任命され、69年から77年までのエルヴィスのステージのリード・ギターを勤めた。エルヴィスからは「最もすごいギタリストの1人」と評されている。エルヴィスの死後はジョン・デンバーやエルヴィス・コストロ等と組んで活動した。現在でも「エルヴィス・イン・コンサート」で、エルヴィスの歌に合わせて70年のオリジナル・メンバーたちと演奏を続けている。

カルロス・サンタナ

「歴史上最も偉大な100人のギタリスト」第20位



メキシコ生まれのアメリカのギタリスト。自身の名を冠したラテン・ロック・バンド「サンタナ」を1960年代から率い、現在も活動中。「泣きのギター」「ラテン・ロック」といったキャッチフレーズで呼ばれるが、ラテン、ジャズ、ロックにまたがる音楽性と軽いフットワークの活動で長くアメリカでトップ・ミュージシャンの位置を確保している。69年にアルバム『サンタナ』を発表。このアルバムでの、アフロ・キューバン・リズム、ブルースからの影響、ロック・ギターのソロが渾然となったサウンドで大きな注目を集め、同年ウッドストック・フェスティバルにも出演し、一躍時代の寵児となる。また、アルバム『スーパーナチュラル』でグラミー賞の9部門を独占するという快挙を果たした。

Are You Experienced



ロックに革命をもたらしたジミ・ヘンドリックスの、記念すべきデビュー・アルバム。マネージメントを買って出たアニマルズのベーシスト、チャス・チャンドラーの勧めでエクスペリエンスを結成。同年暮れに、シングル「ハイ・ジョー」でデビューを飾った。'67年3月にはセカンド・シングル「紫のけむり」を発表、人気はうなぎ登りに。そんな中、満を持してリリースされたのが本作。ハヴィーなサウンドにサイケデリックなテイスト、みなぎるワイルドさにめく美しさ、そして圧倒的なギター・プレイと、本作がロックの歴史に刻み込んだ衝撃の大きさは計り知れない。

別冊ジミヘン②

Axis: Bold as Love



前作でロック・シーンに衝撃を与え、ギターに火をつけ破壊するというモンタレー・ポップ・フェスティバルでの驚愕のパフォーマンスで、母国アメリカの聴衆も虜にしたジミ・ヘンドリックス。本作は、同じ年に早くも発表されたセカンド・アルバム。溢れんばかりの勢いを前面に押し出した前作に比べてインパクトでは劣るかもしれないが、彼の才能の幅広さと奥深さをより感じさせてくれる点ではこちらが上。代表曲のひとつである「リトル・ウィング」は、幻想的で、ロマンティックで、かつブルージー。「フローティング」ではファンクとロックの融合を実現。「このアルバムが一番好き」と言うファンが多いのもうなずける傑作。

シンパルながら

美しい出来映え。

Electric Ladyland



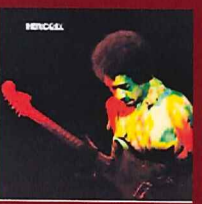
ジミ・ヘンドリックスの最高傑作であり、ロック史上に永遠に残る名盤。彼が全米チャートでNO.1を獲得した唯一のアルバムでもある。ロック、ブルース、サイケデリック、ファンク、ジャズ、ソウルなど様々な音楽性を取り入れ、融合させ、それらの間をシームレスに行き来する中から生み出された新たな音楽世界は、彼の偉大なる到達点を示す作品。全体的な統一感には欠けるが、混沌とした中からヘンドリックスの巨大な才能と魅力が立ち昇ってくる。また、ギター・プレイも本作で絶頂期を迎えた。スティーヴ・ウィンウッド、アル・クーパー、のちにバンド・オブ・ジプシーを組むことになるバディ・マイルスなど、多くのゲストを迎えているのも特徴。カバーではアール・キングの#7も素晴らしいが、なんと言ってもボブ・ディランの#15は、全ロック・ファン必聴の傑作。

First Rays of the New Rising Sun



ジミ・ヘンドリックスが生前、ニュー・アルバムのためにレコーディングしていた音源を基に編まれたのが本作で、生前のジミが計画していた「4枚目のスタジオ・アルバム」に近い形で発表されたもの。収録曲のいくつかは、以前にも不完全な形で発表されたことがあったが、このアルバムによってやっと決定版となった。制作を手がけたのは、ヘンドリックスの右腕として活躍したエンジニア、エディ・クレイマー。現代のテクノロジーを駆使して、当時のヘンドリックスの意向を最大限に活かした形でこの作品を作り上げた。亡くなるまで彼が追求していたのがこの方向性だということの表れ。

Band of Gypsys



'69年にエクスペリエンスは解散。ヘンドリックスは、軍隊時代の友人だったビリー・コックス(b)、『エレクトリック・レディランド』でも共演したバディ・マイルス(ds/vo)と共に、バンド・オブ・ジプシーを結成。彼らは、'69~'70年の大晦日から新年にかけて、ニューヨークのフィルモア・イーストに出演。本作は、そのときの模様を収めたライブ・アルバムで、バンド・オブ・ジプシーはこのあとスタジオ・アルバムを発表することなく空中分解したため、これが唯一のリリース作。また、ヘンドリックスが生前に発表した最後の作品ともなった。ソウル、ファンク色が強いのが特徴で、『エレクトリック・レディランド』以降、ヘンドリックスが目指していた方向性が垣間見られる。

Live at Woodstock



ジミ・ヘンドリックスの生涯のステージのうち、もっとも有名で、もっとも鮮烈な印象を後世に残したのが、このウッドストック・フェスティバルでのもの。このフェスはニューヨーク州の郊外で1969年8月に行われたもの。エクスペリエンスはすでに解散しており、ジミはミッチ・ミッチェル(ds)、ビリー・コックス(b)、ラリー・リー(g)らと結成したジプシー・サン・&レインボウズで出演。いずれも圧巻の演奏だが、ノイズまみれの激しいギター・フィードバック・サウンドによってずたずたに破壊され、再構築されたアメリカ国歌「星条旗」は、やはり圧巻。泥沼のヴェトナム戦争を続けるアメリカの状況を音で奏し、60年代という時代そのものを象徴する伝説的なパフォーマンスとなった演奏である。

Smash Hits



生前にリリースされた唯一のベスト・アルバム。内容的にはシングル・コレクションという色合いも強く、デビュー曲の「ハイ・ジョー」とB面の「ストーン・フリー」、大出世曲の「紫のけむり」とB面の「51st Anniversary」、サード・シングルの「風の中のメアリー」とB面の「ハイウェイ・チャイルド」が収録された初めてのアルバムとなった。現在ではそれらは『アー・ユー・エクスペリエンス?』に追加収録されているため、本作の独自性は薄くなってしまったが、のちに『エレクトリック・レディランド』に収録されることになる「真夜中のランプ」のB面曲、「賭博師サムのサイコロ」は、ここでしか聴けないレアなナンバー。彼の最も美しい楽曲群を、最も手軽に楽しめるという意味では、これ以上のアルバムはないと言っていい。

CDコーナーに義なき戦い

ジョジョの奇妙な冒険 25周年&再アニメ化

上部の看板もサイド仕切箱 POP も美しい。
なか果音とセリフ POP で 立体的に観える！



渾身のコメントは別冊。

エイジャの赤石



カーズ達が捜し求めていた、ルビーのように赤い石。結晶内で光を何億回も反射を繰り返して増幅した後、ルビーレーザーのように一点に照射する力を持っており、赤石の力で石仮面の骨針を強化しようと考えたカーズは、ローマ皇帝が持つといわれた赤石を入手すべく、2,000年前のヨーロッパに現れた。元ネタはロック・バンド、スティーリー・ダンのアルバム『彩（エイジャ）』で、同バンドのアルバム中で最高の売り上げを記録。このアルバムは、非常に野心的かつ洗練されたものであると見なされており、8分間に及ぶ表題曲は、複雑なジャズの転調と、有名なサクソフォーン奏者ウェイン・ショーターによるソロ、そしてドラマーのスティーヴ・グッドによる巧みなドラム演奏などが含まれている。

カーズ



第二部に登場する「柱の男」の一人で参謀。弱点なき究極の生命体の追求を信念としている。究極生命体になるための研究の過程で「エイジャの赤石」の力を発見。石仮面の完成に必要な「スーパーエイジャ」の所在を突き止めるも、休眠期に入り柱の中で眠りについてた。元ネタはアメリカのロックバンド『カーズ』。長年共に活動を行ってきたリズムギター・ボーカルのリック・オケイセックとベース・ボーカルのベンジャミン・オールを中核に1976年に結成され、1978年にメジャー・デビューしたニュー・ウェイヴバンド。その革新的でユニークな音楽とレコードに劣らぬ音質の正確で高い技術のライブが話題をさらった。

エシディシ



第二部に登場する「柱の男」の一人でカーズの同志。血液を摂氏500℃にまで加温し、この熱を様々に利用する炎の流法（モード）の使い手。元ネタは、オーストラリアのHR/HMバンド『AC/DC』。1980年にリリースされた「Back In Black」の売り上げはこれまでに世界で4900万枚を超え、バンドにとって最大のヒット作となっている。1位マイケルジャクソンの『スリラー』、2位ピンク・フロイドの『狂気』に次ぎ、全世界で歴代3番目に売れたアルバムとして知られている。また、スティーヴ・ボール・ランの登場するファンシー・ヴァレンタインのスタンド『D4C』も元ネタはAC/DCの『悪事と地獄（原題：Dirty deeds done dirt cheap）』から。

キラークイーン



第四部に登場する吉良吉影のスタンドで、指先で触れた物質や生物を「爆弾」に変化させる能力を持つ。名前の由来はイギリスのロック・バンド、クイーンの楽曲『キラークイーン』から。この曲はクイーンが1974年に発表したシングルで、イギリスのチャートで2位と初のスマッシュヒットとなった。また、感知した熱を自動追跡し、爆発するキラークイーン第2の爆弾「シアー・ハート・アタック」と吉良自身がどうしてもなく追い詰められたとき、特定の時点にまで時間をふっ飛ばしやり直すことができる「パイツァ・ダスト」もクイーンの楽曲からきている。

タスク



第七部にあたるスティーヴ・ボール・ランの主人公ジョニー・ジョースターのスタンド。自身の爪を高速に回転させて、弾丸のように発射したり、物体を切り裂く。ジョニーがジャイロから回転の極意を学んだことによりスタンド像が成長し人形のような姿（ACT1）から、やがて人型（ACT4）へと変化していった。元ネタはイギリスのロック・バンド、フリートウッド・マックが発表したアルバムである『牙（タスク）』。メンバーのリンジー・バッキンガムは前作『噂』の成功以来、パンク・ロックやニュー・ウェイヴ等の実験的音楽への傾倒が激しくなっていき、バッキンガムの影響力が強く出ているアルバムである。

別冊 ショジョの奇妙な冒険

ジョジョといえば音楽とは切っても切り離せない人気コミック。

コメント POPの蘊蓄がすごい。

このコーナーで 僕に 1時間は 過ぎせる。

ゴールド・エクスペリエンス



第五部の主人公ジョルノ・ジョバァーナのスタンド。物体に生命を与えることで、欠損した肉体の『部品』を作り、修復することができる。元ネタはアフリカ系アメリカ人のミュージシャンで、ロック、ファンク、ソウル、ブルース、ゴスペル、ハード・ロック、ヒップホップを自在に取り込んだ唯一無二のスタイルで音楽を創造しつづけ、俗に言うミネアポリスサウンドの中心的存在であるプリンスのアルバム『The Gold Experience』から。このアルバムはUK・USにてゴールド・ディスクを獲得している。

スティッキー・フィンガーズ



第五部の主人公ジョルノ・ジョバァーナが所属するチームのリーダーであるブローノ・ブチャラティのスタンド。殴った対象にジッパーを取り付けることができる能力で、ジッパーで開けた空間に隠れたり、異なるもの同士（ちぎれた自分の腕なども）をくっつけたり、単純に切断したりすることができる。元ネタはロック・バンド、ローリング・ストーンズのアルバム『スティッキー・フィンガーズ』。ちなみにこのアルバムのLP版のジャケットには本物のジッパーが取り付けられており、それを開閉できるという仕様になっている。能力自体の由来もここから。

キング・クリムゾン



第五部のラスボスにして、ギャング組織『パッション・ネ』のボス、ディアボロのスタンド。時を吹っ飛ばす能力を持つ。元ネタはイギリスのロック・バンド『キング・クリムゾン』。また、ディアボロの第二人格であるビネガー・ドッピオが、ディアボロより分け与えられた、10秒先を予知することが可能な能力を持つ『エビタフ』の元ネタも『キング・クリムゾン』の『エビタフ』という楽曲、またはライブ・アルバムから。『エビタフ』が収録されている『クリムゾン・キングの宮殿』は、プログレッシブ・ロックというジャンルを確立した記念碑的な作品で、その後のロック史にも多大な影響を与えた。

ホワイト・アルバム



第五部に登場する暗殺チームの一員、ギアッチョのスタンドで、極低温を操り、水分を凝固させたスピードスケート用スーツのような装甲で本体を覆う。元ネタはビートルズ2枚組オリジナルアルバム『ザ・ビートルズ』で、アルバムジャケットは白一色で、そのジャケットのイメージから現在では『ホワイト・アルバム』という俗称で呼ばれている。また、ホワイト・アルバムの技「ジェントリーウィープス」は『ホワイト・アルバム』収録の『ホワイト・マイ・ギター・ジェントリー・ウィープス』からで、エリック・クラプトンがリードギターで参加している。

ザ・グレイトフル・デッド



第五部に登場する暗殺チームの一人、プロシュートのスタンド。生物を無差別に老化させることができる。元ネタは、アメリカのロックバンド『グレイトフル・デッド』。1965年にサンフランシスコで結成され、ロック、フォーク、ジャズ、ブルークラス、カントリー、ブルース、サイケデリック・ロックなど様々な要素を内包している。ライブの長時間にわたる即興演奏を信条としていた。1960年代のヒッピー文化、サイケデリック文化を代表するアーティストである。「デッドヘッズ」と呼ばれる熱狂的な追っかけファンが多く、日本では知名度が高くないが、本国アメリカではアメリカを代表する伝説的バンドとして認識されていて、絶大な人気を誇るバンドのひとつ。

ストーン・フリー



第六部の主人公である空条徐倫のスタンド。自分自身を糸状に変えて操る能力を持つ。元ネタの『ストーン・フリー』は、エリック・クラプトンに「彼には誰も勝てない」と言わせしめた天才ギタリスト、ジミ・ヘンドリックスのファーストシングルのB面にして代表曲の1つである。また、第五部の主人公チームの一人、パンナコッタ・フーゴのスタンド『パープル・ヘイズ』も、ヘンドリックスの楽曲で、1960年代の“代表的なサイケデリックドラッグソング”として、しばしばヘンドリックスの代表曲と言われることもある。

ホワイト・スネーク



第六部に登場するブッチ神父のスタンド。人の記憶とスタンド能力を「ディスク」化させて奪い取ったり読んだりすることができ、またディスクを介して人や物を操ることもできる。元ネタとなっているのは元ディープ・パープルのデイヴィッド・カヴァーデルが結成していたイギリスのヘヴィメタルバンド、『ホワイトスネイク』で、1987年リリースの『Whitesnake: サーペンス・アルバス（白蛇の紋章）』は全米で2位、800万枚以上を売り上げ、大成功を収め、現在でもロック史上に残る作品として記憶されている。また、2011年に日本公演に先立ってLOUD PARK 11にリンプ・ビズキットとのダブルヘッドライナーとして出演した。

ジョジョ



『ジョジョの奇妙な冒険』の主人公の通称。元ネタはビートルズの楽曲「Get Back」の歌詞に出てくる「ジョ・ジョ」。アルバム『ザ・ビートルズ』の制作中に露見したメンバー間の音楽性の違い、様々な軋轢（ボールの独裁者ぶり）、すれ違い等この時期のビートルズは重大な危機を迎えていた。そんな状況を危惧したポールが、「もう一度原点に戻ってやり直そう」と作られた曲で、歌詞に登場する「ジョ・ジョ」とはジョン・レノンのことであるといわれており、ビートルズのメンバーとしての活動意欲を徐々に失い、妻ヨーコとの関係に重きを置くようになったジョンに対してポールが「戻って来い」と呼びかけているものと考えられている。第三部の最後でジョセフがウォークマンで聞いている曲でもある。

ツェペリー族



主人公ジョジョと共に戦い良き師、良き友としてジョジョを助ける一族。元ネタはイギリスのロック・バンドで名実共にロック界を代表する世界的なバンドであり、またヘヴィメタルをも生み出した『レッド・ツェッペリン』。第一部のウィル・ツェペリ、第二部に登場するシーザー・アントニオ・ツェペリや第七部のジャイロ・ツェペリなどが登場し、ジョジョと深い絆を結ぶ。また、ページ、ジョーンズ、プラント、ボーナムというDIOの配下のゾンビが出てくるが元ネタはそれぞれレッド・ツェッペリンのメンバー（ジミー・ページ、ジョン・ポール・ジョーンズ、ロバート・プラント、ジョン・ボーナム）から。

ロバート・E・O・スピードワゴン



ロンドンの貧民街でチンピラを取り仕切るボスで、主人公ジョナサンの人柄にほれ込んで仲間になる男。ジョナサンの死後、アメリカに渡り石油王となり巨万の富を得て、スピードワゴン財団を設立。ジョナサンの妻であるエリナをはじめとするジョースター家との交流は絶やさず、ロバートの死後もジョースター家の強力なバックアップをしている。元ネタはアメリカのロック・バンド『REOスピードワゴン』で、キャッチーなメロディ、爽やかなボーカルで大きな成功を収めた。1991年10月に解散したが、1992年後半に再結成を果たし、現在も活動を続けている。お笑いコンビのスピードワゴンの名前の由来でもある。

ジャン＝ピエール・ポルナレフ



垂直に逆立てられた柱のような髪型をしたフランス人。最初はDIOの手先として登場し、承太郎達を襲撃したが、戦いを経て仲間になる。元ネタはフランスの男性ポップス・シンガーソングライター『ミッシェル・ポルナレフ』。フランスでは国民的歌手としての人気があり、日本でも「シェリーに口づけ」「愛の休日」などのヒット曲で知られている。また、物語に登場するポルナレフの妹のシェリー・ポルナレフはポルナレフの楽曲「シェリーに口づけ」からきている。

ディオ



ジョースター家に代々関わっていくことになる因縁の人物。ジョジョを代表するキャラクターの一人。直接登場するのは第一部と第三部（と第七部）だが、他の部にも間接的に登場し、ジョースターの血統を苦しめていく。第一部では冒頭でジョースター家の養子となり、その財産を狙う。表向きは心技体全て兼ね備えた完璧な人間だが、その裏、ゼロ以下ののにおいがプンプンする生まれつきの悪。元ネタは元レインボー、ブラック・サバスのロニー・ジェイムス・ディオ率いるヘヴィメタル・バンド『ディオ』。ロニー・ジェイムス・ディオがこれまでのバンドで培ってきた幻想的な詞の世界と最先端のヘヴィメタル様式を巧みに組み合わせ、世界中で人気を博した。

クリーム



第2部に登場するDIOの側近であるヴァニラ・アイスのスタンド。スタンドの口が暗黒空間の入り口になっており、あらゆるものを飲み込んでしまう。元ネタは60年代に活動したイギリスのロックバンド『クリーム』。メンバーは、ベーシスト兼ボーカリストのジャック・ブルースとギタリスト兼ボーカリストのエリック・クラプトン、ドラマーのジンジャー・ベイカーから構成され、ブルースとハードロック、サイケデリックロックを融合させたサウンドが特徴で、3人は全く対等の高度な演奏力で火花を散らし、強烈なアドリブを繰り広げ、誰かがリーダーシップを取って牽引するというようなことはなかった。活動期間はわずか二年間だったが、後世のロックバンドたちに多大な影響を与えた。

イギー



砂のスタンド「ザ・フール」を操る犬。血統書付きのボストン・テリアで、とある大金持ちの家で飼われていたが、非常に高い知性を持っていた為、次第に飼い主を含めた人間全般を見下すようになり家出した。その後、ニューヨークで野良犬のボス格として君臨していた所を捕らえられ、ジョースター一行がエジプトに上陸した直後に、助っ人として強引に連れて来られる。元ネタはアメリカのロック歌手『イギー・ポップ』。荒削りなギターと衝動的なボーカルは、当時のサイケデリック・サウンドへのアンチテーゼであり、MC5と共にパンク・ロックの先駆けとなった。

クレイジー・ダイヤモンド



第四部の主人公である東方仗助のスタンド。物体（生物を含む）の受けた傷を修復することができるが、自分の傷を治したり、既に死んでしまった生物を蘇らせたりすることはできない。元ネタはイギリスのプロGRESSIV・ロック・バンドのピンク・フロイドが1975年に発表した曲『クレイジー・ダイヤモンド(Shine On You Crazy Diamond)』。この曲は1975年発表のアルバム『炎～あなたがここにいてほしい』に、アルバムの最初と最後に2つに分割されて収録され、全部で9つのパートで構成されており、そのうち「Part 5」と「Part 7」がヴォーカル・パートである。

ヘブンズ・ドア



第四部に登場する岸辺露伴のスタンドで、相手を「本」にして、その人物の体験や記憶を読むことができる。元ネタはアメリカのシンガー、ボブ・ディランの楽曲『ノッキン・オン・ヘブンズ・ドア』。ボブ・ディラン本人も出演した1973年の映画『ピリー・ザ・キッド 21才の生涯』の挿入歌で、ボブ・マーリー、エリック・クラプトン、グレイトフル・デッド、マーク・ノップラー、ガンズ・アンド・ローゼズ、アヴリル・ラヴィーンなど数多くのアーティストたちにカバーされた名曲。

ハーヴェスト



第四部に登場する矢安宮重清のスタンド。比較的珍しい群体タイプのスタンドで、小銭や切手を拾って、掻き集めてくる便利な能力。小型のスタンドの集合体で、2、3匹潰したぐらいでは本体のダメージにならない。元ネタはニール・ヤングのアルバムタイトル『Harvest』。全米No.1の大ヒット・シングルとなった名曲「Heart Of Gold(孤独の旅路)」が収録されており、同年に発売された全てのアルバムの中で最も売れたアルバムとなり、「After The Gold Rush」と並んで、ニール・ヤングの代表的傑作アルバム。

レッド・ホット・チリ・ペッパー



第四部に登場する音石 明のスタンド。電力をパワー源にするスタンドで、電線の中を自由に移動し、物体を電線の中に引きずり込むことができる。元ネタはアメリカのバンド『レッド・ホット・チリ・ペッパーズ』。ファンクとハード・ロックやパンク・ロックを混ぜ合わせた、いわゆるラップロック、ファンクロック（ミクスチャー・ロック）バンドの一つで、これらのパイオニアとして活躍し、ラップロックやファンクロックといったジャンル自体をメインストリームへと急浮上させ、その評価向上に大いに貢献した。

ハイウェイ・スター



第四部に登場する噴上裕也のスタンド。遠隔操作型のスタンドで、匂いを覚えた対象を最高速度時速60kmで追跡し続け、追いついた後には養分を吸い取ってしまうという能力。元ネタはイギリスのロック・バンド、ディープ・パープルの曲『Highway Star』で、ディープ・パープルの代表曲の一つ。この楽曲最大の見せ場となるのが、リッキー・ブラックモアのギターソロであり、ギターフレーズは、ギタリストとして必要最低限のギターテクニックが多く含まれており、尚且つ速弾きのインパクトが絶大であったため、ギターを手にした者ならば、その多くがこの楽曲の速弾きをコピーしたとされる。

ストレイ・キャット



「矢」に貫かれた猫が埋められた結果、植物と一体化して復活した姿。「ストレイ・キャット」はスタンド使いであり、またスタンド名でもある。能力は「空気を操る」ことであり、空気を固めて撃ち出したり、クッションにして防御したりと広く応用が可能。元ネタはアメリカのバンド、『ストレイ・キャッツ』。ストレイ・キャッツは80年代にロカビリーを復興させたバンドで、中心人物はリーゼントがトレードマークのブライアン・セッツァー。彼が弾くギターの手音がストレイ・キャッツ・サウンドの特徴の一つとなっている。

エコーズ



第四部に登場する広瀬康一のスタンド。康一の精神的成長に合わせて脱皮するように進化していき、(ACT1)は物体に文字（擬音）を貼り付け、その音を繰り返し響かせる能力、(ACT2)は尻尾を切り離して変形させたしっぽ文字に触れた者に文字に応じた擬音の効果を体感させる能力、(ACT3)は殴った物質を重くするの能力を持つ。元ネタはイギリスのバンドピンク・フロイドの楽曲『エコーズ』。アルバム「おせっかい」に収録された曲で、「原子心母」と並ぶピンク・フロイドの23分30秒近い大作で、ファンから最も人気の高い楽曲でもあり、メンバー4人の持ち味が見事に溶け合った初期フロイドの傑作。



義なき戦い LOUD PARK12



↑
← 奥物 (別冊)
を是非ご覧
頂きたい！

さやざいの
ARTIST 〇〇
さくりに
手描いて
るんですよ！

もちろん LIVE
コラムは
BIG BEN
新聞に。

こちらは手作り ZIK。

雑誌の切り抜き フラージュと手描きで
ここまで！

渾身のコメントは別冊。

ファイルに収めよう → 次頁より

愛情こもった CDミニコーナー。

夏の恒例となった、つくばロックFes (GFB Fes) の成エカを受けて、その他色々な音楽イベントのチケットを取り扱う事が増えてきます。

← ↓ 関連コーナーも好評。

↓ スタッフが推したいARTISTを、好きな様に推す。

愛情こもったミニコーナーは、チャートに関係なく
高回転を記録します。



← 小規模ながら、筑波大学祭でも。



CD
リクエストは店頭でも
🐦
でも受付。→



HEAVY METAL FESTIVAL
LOUD PARK 12

SLAYER スレイヤー

06.09ハットライナー

帝王。スラッシュメタル四天王で唯一ブレないSLAYER。
常に変わらぬ激烈極まりない演奏で悪夢へと突き
落とす。燃える熱が半端ないライブを毎回観せてくれる。
正直、ラストのトリビッドと体力的についていけないくらい。
それでも、この熱を体感できることは楽しみ。

HEAVY METAL FESTIVAL
LOUD PARK 12

HELLWEEN ハロウィン

17-バスドラムの疾走感あふれるメロディックハードメタルの先駆者。
nd.3rdの「keeper of the Seven keys Part 1.2」が有名。
去年のLP12で元メンバーのカイバセンとマイケルキスワのUNISONIC
がハロウィンナンバーをプレイ。その時の盛り上がりは鳥肌モノ。
今でも思い出すと鳥肌です。今年は6th以降の曲を中心にした
セットリストの予定だそう。

HEAVY METAL FESTIVAL
LOUD PARK 12

Children Of Bodom

チルドレンオブボドム

アレキシのテクニカルなギター、ヤンネさんのシンフォニックな
キーボード。憂いを秘めた凶暴性と様式美はこれぞ
北欧メロデス。とにかく元気な大酒呑みのアレキシが走り
回る。去年も2回来日しているのに、今年も来ってくれるとは、
うれしい限り。

HEAVY METAL FESTIVAL
LOUD PARK 12
08もな浅

バックチェリー
BUCKCHERRY

解散復活を経て長い意味で肩の力を抜けた。キャッチで疾走感
あふれるロックンロールへ進化。今年もとびはねちゃうんだぞう
なめ。Voジョシュトッドの衣装の股上の浅さが気になるのは
私だけでしょうか...?

HEAVY METAL FESTIVAL
LOUD PARK 12
08も出演

ソナタ・アークティカ
SONATA ARCTICA

キーボードの入ったキラキラメロディックスピードメタル。これを
「北欧!」という哀愁のある美しいメロディ。早く美しいメロディ
が聴きたいけれどソナタを。

近年、脱メロスピード系向にあるのが少し悲しい....。

HEAVY METAL FESTIVAL
LOUD PARK 12

セバスチャン・バーク
SEBASTIAN BARK

セバスチャン・バーク

メタル界の暴れん坊。
元スキッドロウのボーカル。スキッドロウを聴いた時の衝撃はすごか
った。あの曲ごとに変わる柔軟な歌い方とあのリックス。たーななの?
あれから10年も年をとったが、少年を感じない歌声。オジーの
ように若いギターヒーローを見つけたようだ。どうやらその系、ちよ
ろいの(弱そうだが)。それはさておき、スキッドロウの曲も聴きたいです。

HEAVY METAL FESTIVAL
LOUD PARK 12
08も出演

ドラゴンフォース
Dragonforce

爽やかに疾走するギターとキーボード。伸びのある高音ボーカル。
ソウニカルで早い。ギターもすごいが、これをうたえるボーカルが
スゴイ。と思っていたらボーカル引退...。どうなるDF? と心配して
いたが、いそいでですね。これをうたえる人。新Voマークで作った最新
作(イタル未解禁)も良作でした。楽しみはあひるめライブ!。

HEAVY METAL FESTIVAL
LOUD PARK 12
09も出演

ヒブリア
HIBRIA

ブラジルの正統派メタルバンド。南米特有のフュージョ
ン感は一切ないストレートなメタルでいち推し。Voユーリの高
が気持ちいい。聴けばハマる。ライブも盛り上がりあってマツ!
今回も楽しめちゃうんだろうなと安定感バツリ。

HEAVY METAL FESTIVAL
LOUD PARK 12
10月出演

HALESTORM

ヘイルストーム

新メタルディーバ誕生。LP10での圧倒的なアカペラは
一気に観客をステージ集中させた。ヴォリジの歌う骨太ハード
ロックはカッコ良すぎ。白のフライグVを揺る姿もカッコ良。
リジの第AJのドラムテクニックも鬼力。ドラムソロも楽しい。
アルバム「HALESTORM」4収録の#5「FAMILIAR TASTE OF
POISON」は必聴の名バラード。

HEAVY METAL FESTIVAL
LOUD PARK 11

ANIMETAL USA

アニメタルUSA

おあそび企画の単発モノだろうと思っていたら、2枚目も
出てしまったアニメタルUSA。LP11ではトップバッターで出場
そして、ももクロとも共演。アレンジがこいいし、さすが実力者
揃いの仕上がり。曲たちばかり。アメリカデビューも果たした
そうです。

HEAVY METAL FESTIVAL
LOUD PARK 11
06.07.09出演

ARCH ENEMY

アーチエネミー

泣きのメロデーとアンジェラ・ブソウの女性(巨乳美女バジリアン)
とは思えない強烈なグロウルが印象的なメロディックデスメタル
バンド。一曲の中でくるくるとテンポの変わる曲が多く、個々の
能力が高いこともわかる。ツインギターでメロディアストはギターソロ、
テクニカルなギターソロと楽しめる。アンジェラのグロウルをバックに
ギターに酔いしれたい。今年は第3回クリスマス・アモットが単発。

HEAVY METAL FESTIVAL
LOUD PARK 11

The Darkness

ザ・ダークネス

復活! Darknessが帰ってきた! ジャスティンのファル
セットボイスも絶好調。ヒョロと細い弟ダンシはガンガンとギター
をかき鳴らす。そして、一緒に歌って、とび跳ねる。楽しすぎた
LP11。

アメリカンロックとはひと味違った、ひねくれたロックンロールが
大暴発。

HEAVY METAL FESTIVAL
LOUD PARK 11
07も出演

TRIVIUM ^{トリヴィウム}

アメリカのメタルコアバンド。ボーカルのマシュー・キイチ・ヒーファースが山口県生まれの1人だった。『將軍』というアルバムがあったりと新近感がわく。キイチのクリーンボーカルが耳に入るアルバム『ザ・ワイルド』が1人6人にオススメ。

HEAVY METAL FESTIVAL
LOUD PARK 11

AMARANTHE ^{アマランス}

男女それぞれのクリーンボーカルとデスボーカルという。トリプルボーカルという6人組のスウェーデンのメロデス・メタルバンド。3人のボーカルの掛け合いがハウディなサウンドをよりドラマティックに引き上げています。ステージには3人もボーカルがいると、なんかスゴイ。ステージで動く楽器隊よりタタいてほしい。

HEAVY METAL FESTIVAL
LOUD PARK 10
08にも出演

AVENGED ^{アヴェンジド} SEVENFOLD ^{セブンフォルド}

NWOBHMとLAメタルを合わせた新世代メタルバンド。LP10で七きしぐのために捧げたステージは涙でした。最新作『タイト×ア』はしぐに捧げるアルバム。ドラムはしぐのフェイバリットドラマーのマイク・ポートノイ。(ポートノイが男を上げたかみえたこの音も、のちに勝手にこじれます。)

HEAVY METAL FESTIVAL
LOUD PARK 10

ACCEPT ^{アクセプト}

ウダがいなくてもアクセプトはアクセプトだった。ボーカルにアメリカ人のマークを迎えた、シャーマンメタルの第1世代アクセプト。若いバンドには到底真似のできない低音コーラスにびびる。鬼気迫るフォーメーションも楽しい。フルセットで見たいと思っていたなら、単独来日公演決定です。1/25(日)は8011人!

HEAVY METAL FESTIVAL
LOUD PARK 10

ΣΔAVY エドガイ

メタルオペラプロジェクト AVANTASIAでもソングクリエイターの才能を
発揮しているトビアスサメット率いるジャーマンメタルバンド。
疾走感あるれるメロディから、合唱せずにはいらぬいいサビを持つ
曲など良いも安心なジャーマンメタルはみんなまで楽しめる爽やかな
バンド。

HEAVY METAL FESTIVAL
LOUD PARK 10

AMON アモン
AMARCH アマース

ヴァイキングデスメタルバンド。北欧神話やヴァイキングを
モチーフにした歌詞を力強くうたう。ひげづらの太きお兄さん
(VOヨハンバック)の曲が終わるたびにくり返される「ありがとう
ございました」という丁寧なあいさつに、女子から「かわいい♡」という
声が上がっていたLP10。

HEAVY METAL FESTIVAL
LOUD PARK 10

TURISAS

フィンランドのヴァイキングメタルバンド。 フェリス
バイオリン奏者とアコーディオン奏者があり、フォークメタルな風味
も。赤と黒のフェイスペインティングがライブでは血を浴びた
ように見える。一狩り行ったあとの宴のようなライブ。
Vo.マティアスの深みのある声はセクシーすぎ。狩られても
いいと思う。

HEAVY METAL FESTIVAL
LOUD PARK 10

CHTHONIC ソニック

台湾のブラックメタルバンド。糸一糸のベーシスト、ドリス女唄が
震える。東洋の楽器二胡を取り入れ、東洋ならではの妖し
さと悲哀に満ちた独特のブラックメタル。最新作「TAKASA-
GO ARMY」は日本人の私たちにとって胸をしめつけられる歴史的
事実を基にしたコンセプトアルバム。音楽的にも傑作。

HEAVY METAL FESTIVAL
LOUD PARK 09
06もお演

ANVIL アンヴィル

ドキュメンタリー映画「アンヴィル 夢を諦めきれない男たち」で一躍有名になったカナダのバンド。プレゼンメタル一筋40年！これぞメタル！映画のラストではLP06のステージに上がる姿に感嘆。そして、3年後LP09ではサグステージながらトリをつとめます。
そのサマウのアルバム「This is Thirteen」

HEAVY METAL FESTIVAL
LOUD PARK 09

GOTTHARD

ゴットハート

LP09 2日目、今日イブのライブを観せてくれたGOTTHARD。今時めずらしいくらいの骨太なブルージなハードロックは古くさい印象は否めないが、情熱的で温かみのあるライブでずーっと見ていたかった。スティーブリーの圧倒的なライブパフォーマンスは世界屈指。もっとライブを見たかったよ。

HEAVY METAL FESTIVAL
LOUD PARK 09

STEEL PANTHER スティールパンサー

様々なバンドで活躍した実力派たちが80'sメタルバンドのモトになりきるバンド。ラスベガスでの毎週のステージがアメリカで有名。設定がおもしろすぎる。80'sメタルのどこかできいたことのあるメタル(たいていパクリ)が特徴。とり早く80'sメタルっぽいものをきくにはおススメ？歌詞はどいまでもヒキイなので、ヘッドフォンで。

HEAVY METAL FESTIVAL
LOUD PARK 09

Heat ヒート

メロディアス過ぎて思わずまろりしてしまう80'sテイスト満載のメロディアスロックバンド。やっている本人達は20代半ばのお兄ちゃんたちというのがまたイイ。え？ボーカルなの？という風貌のキーのハスキーで伸びのあるダイナミックな歌声も心地よい。

HEAVY METAL FESTIVAL
LOUD PARK 09

DEAD BY APRIL デッドバイエイプリル

クリーンボイスとデスボイスのツインボーカルで、北欧特有の冷ややかながキャッチーなメロデューメタルをベースに、ポップス、エレクトロなど様々な音楽を混ぜ込む。メタルメタルしていないところが今風なカンジ。モヒカン率高い。

HEAVY METAL FESTIVAL
LOUD PARK 08

BULLET FOR MY VALENTINE ブレットフォーマイヴァレンタイン

1st AL「POISON」では青めのメタルを展開し、単調な印象もあったが、2ndはまんて3rd AL「Fever」で進化。ボーカルも演奏も格段に進歩。英国メタルを担うバンドへ。

HEAVY METAL FESTIVAL
LOUD PARK 08

APOCALYPTICA アポカリプティカ

フィンランドのデスメタルバンド。ギターとはちがったつややかで雄大な音が独自のメタルを展開。メタルとクラシックの近さを感じる。LP 08でラスト歌ものの「I'm Not Jesus」でメオ・ティエンスの反応を見たメンバーの笑顔が、なんだかすごくうれしかった。それゆ、ちゃんと覚えてきますって！

HEAVY METAL FESTIVAL
LOUD PARK 07

SAXON サクソン

イギリスのNWOBHMを代表するバンド。LP 08で28年ぶりに来日。デニム&レザーなバイカーをテーマにした歌詞やスタイルでバイカーに人気(バイクに乗れるメンバーはビブアホ...)。硬派な音楽性でしびれます。LP 08で初めて生でみたSAXONはかっこよすぎて、以降の来日はだいたい参戦決定です。

HEAVY METAL FESTIVAL
LOUD PARK 07

WIG WAM

ウィグワム

奇抜なリックスと素晴らしい曲。この大いなる矛盾がたまらない！リッウェーの国民的英雄。毒々しくも健康的な聴いてよし、観てよしの80'sメタル満載。Voグラムのうたもステージングも一級品だし、ティーニーのギターは鳥肌モノ!! 見た目も音楽も楽しめたもの勝ち!!

HEAVY METAL FESTIVAL
LOUD PARK 06

HARDCORE ★ ハードコアスーパー SUPERSTAR

全カバのパフォーマンスが私たちを魅了するスウェーデンのバッドボーイズ系ロックンロールバンド。若手のバンドにファンが多いようで、至るところでバンドの名を目にする。「楽しむ」を真剣に楽しんでいるところがいい。骨の髄までロックンロールの4人。形だけで終わるロックンロールパーティーは終わらない。

HEAVY METAL FESTIVAL
LOUD PARK 06

Within Temptation

ウィズイン テンペテーション

シンフォニックゴシックメタルの中心的バンド。美しきボーカルオランダの至宝シャロン・テン・アデルのソプラノに涙。4thアルバム「Heart of Everything」はよりハヴィタ方向へ進み、シャロンの可憐なボーカルが引き立つ。ライブCD「Black Symphony」は付属のDVDでシャロン嬢を目と耳で楽しめます。

HEAVY METAL FESTIVAL
LOUD PARK 12
06を出演

IN FLAMES

インフレイムス

スウェーデンのバンド。初期はメロディックデスメタルを主として、メロディックデスメタル(通称メロデス)の火付け役。メロデスとインフレイムス入門として「コロニー」がオススメ。5th以降オルタナよりになり賛否がわかれる。